

書のまち春日井と小野道風 調べてみよう！ 小野道風

指導者用資料

「書のまち春日井と小野道風（中学年用）」、「調べてみよう！小野道風（高学年用）」のねらいは、次の四点について理解していただくことです。

- 小野道風は平安時代の能書のうしよである。
- 小野道風の書（和様の書）の特徴。
- 春日井には小野道風誕生伝説がある。
- 「書のまち春日井」ではどんなことをしているか。

この指導者用資料には、児童が疑問をもちそうなこと、指導される先生に知っておいていただきたいことなどをまとめてみました。

小野道風

◎ポイント

小野道風は平安時代の中ごろに生きた人で、幼いころから字が上手でした。成人してからは役人として宮廷に仕え、天皇の手紙（公文書）を清書したり、内裏の額や屏風に字を書いたりする仕事をしました。当時から能書として尊重されていました。

○小野道風肖像画

ここに掲載したのは春日井市松河戸町にある観音寺所蔵の肖像画です。道風の子の奉時とむらが描いたという伝承がありますが、実際の作者は不明です。鎌倉時代に描かれた原画を江戸時代に模写したものと考えられています。

○小野道風はその当時一番手が上手だった。

天皇の代替わりのときに行われる大切な儀式に大嘗祭だいじょうさいがあります。大嘗祭を行うために建てられる悠紀殿ゆきでん、主基殿すきでんはそれぞれ新しい屏風が置かれます。その屏風に字を書くのは、そのときに最も優れた能書が選ばれます。道風は朱雀天皇、村上天皇の二代にわたって大嘗祭の屏風の書き手に選ばれています。そうしたことから道風が当時一番の書き手だったことがわかります。

○小野道風は書家ではない。

「書家」とは、「書道を教授することを職業としている人」のことです。道風は役人として生涯宮廷に勤め、書道教授はしていません。書家があらわれるのは江戸時代中期になってからです。道風のように書が上手な人は「能書のうしよ」と呼ばれています。

○小野道風の身分

平安時代の貴族の位や宮廷での地位は家柄に大きく左右されていきました。道風のころには藤原氏が勢力をもっていたので、佐理や行成は若いころから高い地位に就いていました。小野氏である道風は出世することはあまりできませんでしたが、能書として尊重されていたのです。

○「三跡」とは。

小野道風の筆跡を「野跡」、藤原佐理の筆跡を「佐跡」、藤原行成は権大納言という高い地位にあったのでその筆跡を「権跡」といい、その三人の筆跡を「三跡」というのが本来の意味です。いつの間にか、それが筆跡ではなく人物をさすようになったのです。佐理（九四四〜九八）は道風から多くのことを直接学びました。行成（九七二〜一〇二七）は道風の没後に生まれましたが、道風を夢に見るほどあこがれて、道風の書を懸命に習ったという話が伝えられています。現存する行成の書を見ると道風の影響を強く受けています。

「三跡」に対して、平安時代前期の能書、空海・嵯峨天皇・橘逸勢を「三筆」といいます。三筆の書は、中国の書の影響を強く受けた書です。

○「とうふう」か「みちかぜ」か。

小野道風の名の本来の読み方は「おののみちかぜ」、藤原佐理は「ふじわらのすけまさ」、藤原行成は「ふじわらのゆきなり」です。一芸に秀でた人の名を音読みするという習慣があり、そ

の読み方を「有職読み」といいます。道風、佐理、行成は書に秀でていたので、「とうふう」、「さり」、「こうぜい」と音読みされてきました。春日井でも古くから「とうふうさん」と呼ばれていたのも、今もそう呼んでいます。

○「やなぎにとびつくかえる」は実話ではない。

有名な話で、努力の大切さを教える佳話なのでここに載せましたが、これは実話ではありません。この話が記された書物で最も古いのが三浦梅園（一七二三〜八九）の『梅園叢書』です。それ以前のいくつもの書物に道風のことや記されていますが、どこにも柳も蛙も出てきません。したがって、この逸話は江戸時代に創作されたものと考えられています。

道風の書

◎ポイント

道風の書の特徴は、全体的に柔らかく穏やかな感じがすることです。そのような特徴を出すためにいろいろな工夫をしています。

道風が生きた平安時代中期に興った国風文化の影響を受けていることも見逃せません。

○道風の書の工夫

道風は和様の書を書くためにいろいろな工夫をしています。「屏風土代」の「春」と、書写の教科書にある字の右はらいとを比較してみてください。教科書の右はらいは、筆を強く押し

えてから徐々に持ち上げています。そうすることによって、線の太きに変化が生じ、最後の部分が三角形になって尖っています。それに対して、道風の右はらいはすべて同じ太きで書かれ、最後も丸くなっています。

この他にも、「屏風土代」3行目「思」の第2画の横画から縦画に移る部分や、最終行「打」の最終画の撥ねる部分を丸くすることなど、いろいろな部分に工夫をして、全体に柔らかい感じになるようにしています。

書写の教科書では、筆の先端が基本的に、横画では画の上端を、縦画では画の左端を通る書法を学びます。それに対して道風の書法は、筆の先端が常に画の中央を通るようにしています。そうすることによって、このような柔らかい表現が可能になるのです。

和様の書は江戸時代まで日本書道の中心的な流れとなつて受け継がれましたが、明治時代以後は中国風の書が圧倒的に多く書かれるようになり、学校教育でも和様の書が教えられることはなくなりました。

○国風文化

道風が生きた平安時代中期までの日本の文化は中国の影響を色濃く受けていました。遣隋使・遣唐使を派遣して、進んだ中国の文化を取り入れていたのです。

平安時代中期になると、唐が衰えたということもあり、中国の模倣ではない、新しい日本の文化を築こうという機運が盛り

上がってきました。そして、絵画・文学・建築・宗教から生活文化にいたるまで、日本人の感性に合った独自の文化「国風文化」が発達しました。

○ひらがなのでき方

国風文化の一例として、高学年用には「ひらがなのでき方」を取り上げています。平安時代に漢字をもとにしてひらがなが生まれました。漢字からひらがなに移る途中の文字を草そうがなといい、ここでは伝小野道風筆秋萩帖から採ったものを掲載しています。

○源氏物語絵巻

源氏物語第十七帖「えあわせ絵合」に道風が文字を書いた絵巻が登場し、「今めかしうをかしげ」と評されています。残念ながら、徳川美術館所蔵の源氏物語絵巻にはその部分が残っていません。

道風の誕生伝説

春日井には次のような道風誕生伝説があります。

小野葛すずお絃がなんらかの理由で現在の春日井市に滞在していたときに、里人の娘との間に生まれたのが道風である。幼少時代を春日井で過ごした道風は、十歳くらいになると父親に連れられて京にのぼった。

◎ポイント

道風が春日井で生まれたという確実な証拠はありません。それで、「伝説」という言葉をつけています。

しかし、道風が春日井で生まれたということがたとえ史実であつたとしても、それだけでは「書のまち」とは言えません。道風が本当に春日井で生まれたかどうかが重要なことなのではなく、私たちの先人が道風を敬つて書道文化の振興に努めてきて、今も書が盛んであるという事実が大切なのです。

○小野朝臣遺跡碑

小野朝臣遺跡碑は文化十二年（一八一五）に尾張藩の儒学者である秦鼎はなかなえが文を作り、中西融ゆうが文字を書いた碑です。

刻されている内容を要約すると、次のようになります。

日本で書が上手な人が三人あり、道風はそのなかでも一番である。松河戸では、道風がこの村で生まれたということとを、おとなも子どももみんなが言い伝えている。道風は、中国の唐代や晋代の書にも負けない書を書いた。醍醐天皇は道風の書を中国に送つて自慢したほどである。

道風が生まれたという家の跡は松河戸にあるのだが、確かな史料がない。しかし、『張州府誌ちやうしゅうふし』にも記されているので、必ず証拠があるだろう。誰かこの証拠を見つけて発表してほしい。百年後、千年後でもよいから。

上部に大きな字で「小野朝臣遺跡碑」と横書きされています。「埜」は「野」の古字です。「晁」は「朝」とは別字ですが、音は「チヨウ」、訓は「あさ」なので、「朝」のかわりに使われることがあります。「一」の下に「忠」は、「臣」のそくてん則天文字です。

則天文字とは中国の武則天ぶそくてん（六二〇〜七〇五）が作った字です。

「臣」は家来という意味なので、心を一つにして王に忠義をつくすのが臣だということでのこの字を作ったようです。

○拓本の採り方

① 石碑に紙を水で張り付ける。② タオルで紙を押すと文字の部分が凹む。③ タンポ（綿を布で包んだもの）に拓本用の墨を付けて紙をたたくと、文字以外の部分が黒くなる。④ 紙をはがす。

弾力のある和紙でなければ拓本は採れません。また、石碑に墨を塗るではありません。

【参考図書】

- 『書聖小野道風』中田勇次郎ほか著 春日井市道風記念館
- 『小野道風研究資料集』安達健治編 春日井市道風記念館
- 『小野道風』山本信吉著 吉川弘文館
- 『小野道風』安藤直太朗著 第一法規出版
- 『書道芸術第十四巻 小野道風・藤原佐理』中央公論社
- 『春日井の人物』春日井市教育委員会